

姉川上流の村々 (圖版第一版付)

小 牧 實 繁

一、序

本稿は筆者が昭和九年十月近江國姉川上流地域に試みた實地踏査による聞見を根幹としてその後に知り得た文献上の知識を參考として纏めたものである。

姉川¹⁾の如何なる地點からをその上流と稱すべきか、これを嚴密なる意味に於いて決定することは本稿の目的ではない。唯、茲では姉川が伊吹山西南麓に於いて山麓線を離れ平地に入る地點より山向の部を以て假りに姉川上流と稱するに過ぎない。而して伊吹村大字上野はこの意味に於ける姉川の上流にも屬しないが本稿に於いてそれに言及するのは別に他意ある譯ではない。全然筆者の便宜的取扱に係る。讀者幸にこれを諒とせられよ。

本稿は筆者が地理論叢第三輯に發表した「愛知川上流の村々」の姉妹篇をなすものである。されば本稿に於いて筆者の意圖する所が何であるかなどに就いては讀者は幸に右拙稿を參看せられんことを御願ひする。そして以下直ちに下流より上流に向ひその村々の特異な事情を敘述してゆくこととし度い。讀者は陸地測量部五萬分一地形圖「長濱」「横山」の兩圖幅を參看しつゝ一讀せられんこ

とを御願ひする。

二、各 説

伊吹村字上野では農を主とし、山はコ、エ、ク、サを探る位である。材木も少しはあるが大したことはなく炭焼は行はれない。農としては畑には桑、甘藷、大豆、小豆などを作り、田には裏作として菜種、大麥、小麥を作る。耕作には牛を使役するが牛は主として但馬牛であり丹後牛も多く丹波牛も少しは居る。三歳乃至四歳で来るのであつて一年半乃至二年置く。坂田、浅井、伊香方面の博勞が伴れて来るのである。二百圓乃至時には三百圓も置いて行くことがある。また毎年八、九、十二月の三度伊香郡本ノ本に牛の市があつて出す。此處の運搬具としては背板、櫓などの特異なものがある。柴や草を運搬するのに用ひられるのである。近年伊吹山のスキーが盛んになつて冬季スキー客のために、四、五軒の宿屋が出来てゐるが、何れも宿屋専門である。家が減ずるといふ程のことは無い。唯息子などが都會へ出て行くばかりである。氏神は三宮神社である。

伊吹村伊吹には家が百軒ばかりある。農が主であるが石灰をとつたり(石灰竈一基あり)山稼ぎをしたりなどもする。ホソの木やクヌギ、ヤなどを割木にして櫓で持つて出たりセタで負つて出たりして長濱方面に賣るのである。また伊吹村産業組合で伊吹百草なる藥草を作つてゐる。織田信長が伊吹山中方五十町歩の地に宣教師をして三千種の藥草を植ゑしめたのに初ると言はれるもので現今でも尙、重なるもの百三四十種がとれるのを副業的に刈つて乾して袋に詰めて普通百匁五錢位で大阪

方面に出すのである。⁽³⁾また伊吹には發電所があり、以前はこれで大部金が落ちたが今は昔の夢である。⁽⁴⁾

太平寺は高い段丘乃至は山麓面上にある特異な聚落である。家は十六軒あるが皆んな住まはれてゐる。農が主であるが、田は聚落立地の平坦面上にはなく百五六十米もの下方にあるのであつて其處へ作りに降る。米は幾分は買ふが略食ふ丈けはとれ餘り多く買ふ家は先づあるまい。山稼ぎもするが割木が主で炭焼は少くそれも一、二軒が副業的にやるのでまして炭焼商賣の人とはなない。耕作には牛を使役するが牛は太平寺に六頭居る。牝牛のみで近在の博勞が伴れて來るのである。多くは四、五歳で來るのであつて使ひよいものなら二、三年置く。交換には博勞が金を置いて行くこともあり五分々々のこともあり要するに牛による。聚落立地の附近及びそれより上の方に畑があつて人參、大根、菜、葱、牛蒡、紫蘇その他の野菜や蕎麥や桑が作られてゐる。多くは自家用であるが、少しは人參や牛蒡や蕎麥や山西^{ヤニシ}や長濱方面やに賣りに行く。殊に人參を多く賣る。春蠶も若干はやるので桑が作られてゐるのである。聚落立地の下にも田の外に畑があり桑も若干作られてゐるのを見る。家は二軒だけ死に絶えて減じたがその代り二軒だけ分家が殖えたので結局十六軒で、人間は外へ出るものもあるが中へ入るものもあり人數に大した變りはない。大抵男は山仕事に従事し、また近年は砂防工事に出、伊吹の石灰掘りに雇はれるものも若干はあり、女は畑をやつてゐる。長い田桶^{タケ}(肥料桶)を背板で負ひ上の畑に上つて行く女の姿に同情を禁じ得ないと共に頼母しくもなる。雪は昨年は屋根まで達したが普通は一尺内外である。此處の冬は相當寒いと思はれるが圍爐裡は此

の村には全然見られない。併し風呂は前の開きから入つてそれを閉め上から板の蓋を被る式の所謂地獄風呂であつて此所の冬の寒さを物語るやうでもある。

太平寺なる村名は嘗て其處に相當な寺の存在したことを物語るが、寺は今は太平寺には一軒もなく、昔の寺は郡内大原村の松ヶ崎に移つたと云ふ。檀那寺は上野に眞宗の寺が三ヶ寺ある。(東二、西一)

氏神は聚落立地の上にあり、御神體は猿だと云はれ、四月八日が祭りで家々餅を作り伊吹から神主が參つて祝詞を上げる。以前は九月十七日今は十月一日が秋祭りで赤飯を上げる。村には多少の山稼ぎがあるが山の神はない。春、山の講があるだけである。山の講には亭主分が寄り神さまに神酒を上げ酒を飲む位である。但し、一年中山へ入込む故その日は山の神に休んで貰ひ山には入らず山の神を祭るのであると考へられてゐる。併し何處が山の神といふこともなく、山の神の森といったものもなく、また七五三を張つた山の神の木などいふものもない。尙ほ一月八日にはオコナヒがあり氏神に神酒や大鏡餅などを上げ氏子等が參拜する。

珍らしいものでは山にバイ茸といふのが出て一種の風味を有し、土俗品では藁をシナの皮で編んだ砥石入れのテゴなどが注意せらるべきものである。

尙、太平寺の聚落では家々は南に面せず西南に面してゐる。如何なる理由によるか不明である。或ひは此處には嘗て比叡山の末寺のやうな寺でもあつてそれが比叡山の方角を望んでゐた關係からではないかなどと考へるものもあるかも知れぬが實際は此所の寺は眞言宗であつた。或ひは單に土

地の傾斜の關係によるか。

第一版第一圖は上野と伊吹との間から遙かに太平寺の聚落を望んだところを示す。遠景伊吹の崩れの向つて右の平坦面上に見るのがそれである。

太平寺より小泉に至る道路の兩側、伊吹山の崩れの下の方崩落層上の畑には老桑が植ゑられその間作として甘藷や大豆や小豆や豌豆やが植ゑられてゐる。また桐畑の中に蕎麥を植ゑた部分などもあり、要するに石灰岩のから／＼した崩落層の上のことであるから耕作は決して集約的ではない。

小泉には家が二十軒と言はれるが實際は十七、八軒であるとも言ふ。昔は三十二、三軒もあつたのが減じたのである。

百姓が主で山は柴ぐらゐであり、木は無くなつた。炭焼も少ししか行はれない。山は自分持もあり、村持もある。田は裏作も出来ぬことはないが引合はないので餘り行はれない。米は食ふ丈けはあり一杯々々である。

氏神は村社谷王神社^{ヤヅ}で舊三月九日と八朔即ち舊八月一日とが祭である。神主は伊吹から来る。寺は東本願寺派^〇。山の神としてはなく、山の講もない。

雪は普通二尺位降り、去年は六尺も降つた。

大久保には家が九十軒ある。或ひは百軒とも言ふが家は減る方だと言ふ。農が主であるが炭を焼くものもある。農の間に焼くのである。山は個人持も村持もある。炭は黒炭^{クロズ}で自動車で出すこともあるが多くの荷車で人が引いて出すのである。畑には若干の粟を作り(粟は餅に搗く)桑を作り養蠶

も少しは行ふ。また伊吹の藥草をとつて大阪方面へ百匁五錢くらゐで送るものもあり、また村内で天鷲絨^{ビロウド}を織る家もある。村の上端で水力を利用して製材をするものもあるが(杉、松材)固より小規模のものである。

氏神は八幡神社で、寺は眞宗大谷派のものが二ヶ寺ある。⁽¹²⁾秋葉さんはあるが山の神はない。

この村では男も女も雪袴^{ユキバカマ}をはく。昔はヌノ(麻)で作つたが今は多くは木棉を買つて作る。此の地方ではカルサン、タツケなどとは稱せずユキバカマといふ。

大久保までが坂田郡伊吹村のうちであるが、要するに伊吹村全體四百五十戸のうち米の足りるのは二百五十戸ばかりであとの二百戸ばかりは米が不足であり、それを主として山稼ぎで補つてゐるものと言へる。

ここで一つ近江國輿地志略に載せる昔の旅行記を引用して此の地に於ける古今の變遷を知るよすがとしよう。

太平寺に上る、寺の門前に至る。寺三字。奥に本堂あり。觀音を安置す。眞言宗、門前の在家二十八ばかり。(拙藏寫本には二十ばかり、とあり)太平寺村といふ。山畑のみにして田地なし。大山の半腹故九夏の天も涼氣はなはしく蚊帳をつらず。この上の太平に蕎麥を蒔、土地廣漠にして民業にあまる。性味甚異なり。畠の盡^{カキリ}を中より仕切て、隔年に地を休せて蒔く。湖水の舟より遠く望ば、屏風に色紙をうつたるが如し。寺の南藏の中といふ空谷^{カラコク}あり。羚羊^{カモンシ}を、熊狼の猛獸を怖れて崖に角を懸て栖ともいふ。寺中の學頭を中の房といふ。客殿より西を臨ば、湖水眼下に見下す。夫より下て北に向ひ長尾寺に至る。(小牧莊、大久保にあり)小和泉、大久保、板波などいふ。山里より牛馬の通ふ大道なり。道の兩方みな山畑なり。東の方は伊吹の白砂利といふ。牧童高岸より刈草に跨、姉川の岸頭まで一文字に下る目撃^{マシメキ}の間なり。この白石を燒て石灰となす。小泉の百姓運上を奉て

諸國に出す。眞の石灰はこの山より出る。石灰竈二口あり、常に一片の煙半天に聳。(中略)この邊伊吹の西北にあたる。民の宅秋の末冬の比より積雪軒をうづみ堅氷川を塞ぐ。常に夜の明ることをそく、日の暮ことはやし。稍寒食清明の比谷々の雪消、深山の鶯はるを知る。轡陽一時に發生し、楊梅桃李花の開ること只一時なり。とりはき櫻多野山爛熳たり。(近江國輿地志略、卷之八十一、坂田郡第五)

大久保より下板並に至る間で、吉槻シモから下へ馬車で炭を搬出する人に會ふ。これによると吉槻の炭は凡てその西方七廻り峠を越して岡谷オカダニから長濱方面に出るとは限らないのである。このことは牛に就いても言へる。筆者は板並の人達が數人東草野村の姉川谷で産れた仔牛十數頭を追つて上野に出るのに上野伊吹間で會つたのである。(此のうちの二人は翌日岡谷から七廻り峠を越えて歸つて來た。筆者は峠道で再びその二人に遭遇したのである)

下板並(四)には今家が四十三軒ある。四十五軒であつたこともあり、四十一、二軒であつたこともあるが非常に減じた方でもない。近年、一、二軒減じたのみである。

此處は農三分に山七分で、山は自分持ちが少く部落持ちが多いのであるが山では炭を燒きまた薪を作る。炭は黒炭であるが、竈は在來竈で、大正式などは面倒が多い割合に効能は少いと土地の人達は言つてゐる。東海道線へは殆んど出さず小賣で長濱方面へ出す方が多い。杉皮などもとれるが大したことはない。

畑には老桑が多く養蠶も少しは行はれる。^(一)また天鷲絨を織る家が一、二軒はある。

氏神は村社八阪神社で春は四月六日、秋は舊九月一日が祭である。山の神はないが山講ヤマコウはあり、舊三月九日家々餅や神酒をあげ山稼ヤマカぎを休む。また野神祭といふのがあり普通ハガミハガミといひ實際野神があるのではないが氏神の小祭で湯の花ユノハナを上げる。寺は一軒、眞宗東本願寺派。

この村でも人々は雪袴ユキハカマをはいてゐる。また山には山の芋ヤマノイモを産するらしく、それを土産に上野の方へ出る人に筆者は出會つたのである。

田の耕作には牛を使役する。下板並には牛が十頭くらゐ居るが、凡て牝牛である。これは仔牛をとるためでもある。大體此の姉川の谷では牝牛しか飼はず、郡農會の種牛が吉槻ヨシキに居てそれに行くのである。下板並から甲津原に至る東草野村の姉川谷で年々百頭くらゐの仔牛が産れる。今年の八月頃には一頭七、八十圓で賣れた。昨十八日の品評會では百圓乃至百拾圓にも賣れた。但し牝牛の仔は半値である。農會で賣つて呉れるのであるが、今ではそれが待てず、博勞ハクロウに賣つて仕舞ふことが多い。今年は十月十八日東淺井郡畜産組合、東草野村生産組合の主催で小學校庭で仔牛の品評會があつた。前述の板並から仔牛を連れて上野へ賣りに出た人といふのはこの品評會で買つた人であつたのである。

上板並には家が九十二、三軒ある。家は餘り減じない。

農七分に山三分であるが米は不足で薪や炭や割木等を賣つて米を買ひ歸るのである。田の耕作には牛を使役するが上板並には牛が四十頭居る。牝ばかりで仔牛をとるのもまたその飼育の一目的である。親牛は三歳位で來り五、六年は使ふ。博勞が交換に來るのである。田にはまた多く牛の糞コエ

を入れる。米は凡て田で操作してもみにしてから家に持歸るのである。もみはかますに入れ背板で背つたり牛の背につけたりして運搬する。收穫時は村は殆んど無人で晝の辨當も小晝コビ（四時頃のマ）も田で食ひ子供なども田で遊び大人は唯收穫にのみ餘念がない。辨當はテゴに入れてゐる。テゴには色々あるが蒲ガを糸で編んで作つたものなどは上等なのであらう。背板でものを負つてゐて休む時にはネヅ、エで荷を支へる。働く人は男も女も雪袴をつけてゐる。雪袴は多くは木綿製であるがその木綿にも冬仕事に家で織つたものが多いのである。尤も、きれは長濱方面から買ふ人も多い。山は炭と薪とが主で材木は少ない。前者は長濱方面に出す。炭焼竈から煙の立つのが通りすがりにも見える。

天鵞絨を織る家も若干ある。製品は長濱京都方面へ出すのである。

氏神は春日神社（イ）で春四月十三日、樂大鼓で祭をする。神主は上板並にゐる。（甲津原まで行く）八月十五日頃野神祭があり湯の花を上げる。寺は東本願寺派（ロ）。

雪は相當降るらしく雪止めを有する家が見られる。また板並では大抵の家に圍爐裡がある。

上板並の足ヶ俣川橋を渡ると發電所がある。

吉槻には家が八十五、六軒あるがうち四、五軒は他に出てゐる。昔は百軒あつたのだと言ふ。多くは長濱や大阪方面に出たのである。農八分に山二分、或ひは農六分に山四分とも言ふ。田は五十町歩ばかりあり吉槻で食ふ丈けの米はとれるのみならず、餘りを奥や西や下へ賣る。（米を搗くのは多くは水車でガッタリスギシは殆んど見られない。）西へは車が通じないので肩で出す。裏に麥を作るものも

あるが裏作すると翌年の米作が面白くないので餘り行はれない。田の耕作には牛を役用するが吉槻には牛が三十頭ばかり居る。凡て牝牛で家で飼ふ。牛小屋をウ、マヤと言ふ。親牛は博勞が木之本邊から伴れて來るもので普通三歳位で來、五、六年も置く。尤も流が惡ければ換へる。郡農會の種牛が一頭吉槻に居りそれにかけて仔牛をとる。年二回、七月と十月とに品評會があつて郡農會などに賣る。七、八十頭も賣れる年がある。牛には草のある頃は萱草やマ、マコなどを與へる。マ、マコは金平糖草のことで刺があるので繼母がマ、マコの尻を拭いたといふのでかく俗稱するのである。田の稻は稻木にかけて乾してゐる所もあるが、そのまゝ田の面に逆さに立てて乾してゐる所も多い。また畑には桑殊に老桑が多く養蠶も行はれるらしい。

山は材木と炭焼とである。山の斜面の杉を切つてゐる所が見られまた炭焼の竈も見え、(吉槻より岡谷に至る間の山の斜面のものなどは最も地の利を得たものであらう。)小規模の製材があつて極木を、東草野村に唯一頭といふ馬で春照の方に出す人にも會ふ。また薪をも出す。炭、材木、薪は下へも、山越えて西へも出す。(岡谷から峠を越して吉槻へ歸る母と娘とは炭俵を負つてゐた)

吉槻にはまた天鵝絨を織る家が四軒ばかりある。製品は板並から長濱方面へ出すのである。

野外の勞働には此の土地の人でも雪袴を着ける。それには自家製のヌ、ノ(麻)を用ひるものも尠くない。ヌ、ノは地機で織る方が織り易い。(カミ機は立つて織る)また田の仕事などには手にコ、テを着ける。

住居に關しては母屋に對して隱居のある家があり、洗場として屋外に別に水小屋を有するものが

多い。其處から風呂水を汲んだりそこで洗面をしたり、炊事のことを洗つたりするのである。飲用には別に淨水を山から引いてゐる。その淨水が水小屋に導かれることが多い。また大抵の家には三尺四方位の圍爐裡が切られて居り、中にカナゴを置き上からはアマがかかる。

氏神は村社吉野神社⁽¹⁹⁾で、四月三日(新)が祭である。(神主も居る。)山の神も野神もない。山講は昔からあつたが今は日も定まらぬやうになつてゐる。また沖ノ島、白石、竹生島などの島々に飾られた琵琶湖を隔てて遙かに比良の連峰まで望み得る七廻峠にも一小祠があるが、これは峠の氣分を一層濃厚ならしめる手向明神の類であらう。寺は眞宗東本願寺派⁽²⁰⁾。

吉槻から奥では山と農とが五分々々となる。

吉槻から甲賀への道で、背板に炭を負ひその上に縄製のテゴに辨當を入れたのを載せた雪袴をはいた二人の女に會ふ。甲津原から下つて來たので炭を岡谷まで出すのであると言ふ。ここまでは下りが多いが吉槻から四一三米の峠を越さねばならない。大抵な苦勞ではないと思ふ。炭は何貫俵と定めては居ず岡谷でかけて貰ふのであるといふ山人の純朴さ。歸りには日用品や俵などを持つて歸るのであると言ふ。炭は矢張黒炭である。

田には稻木もあるが稻は大東のまゝ穂を上にして田の面に乾かされてゐるものが尠くない。

甲賀には家が四十軒ほどある。五十軒と言ふが實際はそれ程はなく四十軒餘りといふところである。米は足らぬ方で不足の分は吉槻や下草野村の方から買ふ。耕作には牛を使役するが甲賀には牛は六頭しか居ない。牝牛のみである。炭を出すが普通は四貫俵で岡谷、鍛冶屋の方に出す。炭出し

歸りの女數人に會つたが歸りの荷は多くは空で僅かに俵を持歸るものがあるに過ぎない。桑畑も若干はあるから養蠶も行はれるものらしい。

家には信州や飛驒などで見ると式の板葺の軒の廣いものが多い。(そして氏神は白山神社(シロヤマ)といふからこの村の或る部分は中央高地方面から入つた人々からなるのではなからうかなどと想像もせられる)また飲料水を山から引いて鉛管で姉川の谷の中空を横ぎり渡してゐるものがある。雪は相當深いらしく板葺の家には雪止めを施してゐる。圍爐裡は家毎にあり、その柴部屋(シバベヤ)に近い席をヒ、イ、ダ、キ、ド、コと言ふといふ。

氏神は上述の白山神社であるが山の神は別でない。否白山神社自身が山の神ではないか。山の講はない。氏神の所に寺があるが宗旨は東本願寺派である。(註)

曲谷(マガタニ)には家が五十軒ばかりある。昔は七十軒もあつたが今は五十軒が切れまあ四十五、六軒といふところであらう。

米はやつと足りる程度である。田の耕作には牛を使役するが牛は牝牛ばかりである。曲谷に十五頭ばかり居る。丹後牛が主で三歳位で来るが使ひよければ十年も置く。尤も駄目ならば直ぐ出す。耕作だけにでなく糶(モミ)などを運搬するにも牛を使つてゐる者がある。尤も糶も背板で運ぶものが多い。餘分の米は甲賀の方に賣る。(米は多く水車で搗く)裏作は行はない。五月初めに種を蒔き六月初めに植付け十月一杯で收穫を終る。(稻を乾すには稻木を用ひてゐる)そしてその後牛を使つて田を起すのである。その間に養蠶もやりまた山行きをするが(杉材を現場ではつつて置いて上草野の方へ

出すといふ人の労働をも見た。十二月の暮からは殆んど遊びである。養蠶では春蠶と夏蠶とをやるが夏蠶が主で春蠶を飼ふものは少い。桑は老桑が多い。

山は炭と薪とであるがそれは前述の如く農の間に稼ぐのであり、冬は雪が深く普通五、六尺から八尺、昨年は一丈から一丈五尺にも達した位であるから山行は出来ず、冬は殆んど遊びである。(家々矢張り圍爐裡を有する)女は紡績の糸を買つて來て家でよりをかけ布に織つて雪袴などを作り、男は草履などを作るのみで全く遊びである。炭は岡谷方面へ出す。杉の丸太が切られ板や樫に引かれたものを若干見るがこれは目下吉槻に新築中の役場の建築に使用されるものであり、加之その一部は板並の人が發動機を持つて來て挽いたものであり、曲谷には山村の要素が濃厚ではない。薪は車で少しは出らしい。薪が村の下端に貯へられ荷車が數臺置かれてゐたのである。

氏神は白山神社で相當立派な御社である。四月二十三日が祭である。山の神は二ヶ所にある。⁽²⁴⁾天神とも天満宮とも云ひ祠がある。十月七日が祭で神主に參つて貰ひ、堅餅^{カタモチ}を搗いて上げその他神酒やその時の珍らしいものなどをも上げる。その日は山に入らないのは昔からの定めである。また九月二十三日かに山の講があるといふ。野神といふのもあると。併し天神(天満宮)はあるが山の神はない、山の講もなく野神もないと言ふ人もあつた。寺は東本願寺派⁽²⁵⁾。

土俗品には落穂を拾つて入れるドン^ハと稱する籠などの特異なものがある。

猪垣は全然存在しない。かかる山國であるが猪は餘り出ぬらしい。山に深い木が無いからではないかと思ふ。

曲谷から上流甲津原への道で地質が花崗岩になり、下流の古生層の土地よりは何かしら明るい感じを與へるやうに思はれる。

甲津原には家が六十軒ばかりある。五、六年前には八十軒もあつたのが追々に減じたのである。愛知郡へ出た家が二、三軒あり他は多くは長濱方面に出たのである、京阪へ出た者は少い。農が主で山は副である。

米は甲津原で食ふだけはとれる。田の耕作には牛を使役するが、牛は甲津原に二十頭ばかり居る。牝牛ばかりである。三、四歳で博勞が伴れて來るのである。此所でこしらへるものも居る。丹後牛に次ぐいい牛だと云はれる。牛には春から夏にかけては草を喰はせ冬は藁を與へる。田の肥料としては藁を牛に踏ませた厩肥(牛小屋をウマヤといふ)や春木の芽を刈つて作つた田柴や田草やを入れる。田柴は最もいいとせられてゐる。金肥を施すやうなことは滅多にない。田柴田草が厩肥と共に入れられるのであつてこれが肥料の主なるものである。田の面に田柴を置きそれに土を被せかけたのなどが見られる。一反の收穫高は四、五俵(四斗俵)といふところである。稻はハサで乾し粃をこいた後の藁はススキ棒にすいて置く。粃はモミカチキネでかつて臼で引き玄米はガッター式のカラウスで搗く。ガッター式のカラウスとはミ(箕の意ならん)と稱する木を削つて作つた水受けに水が一杯になるとガッターと落ちて、その軸の反對側の杵で米が搗けるやうな仕掛けになつてゐるもので、日中に一斗夜中に一斗都合一日に二斗即ち半俵搗ける。カラウスは私有のものでそれを所有しないものは他人のそれで搗かして貰ひ糠を與へたり手間で返したりする。モミカチキネで粃をかつ

のは稻が南部種で籾にヒゲがあるので其れを脱落せしめるためである。三十年も以前は猪が出て田を荒したのでおとし穴を作つたが十數年來猪は出ず猪垣の必要もない。昨年漸く一頭だけ出て獲られた。

田の畦に桑を植ゑてゐる所すらあり、また畑には老桑が多く、以前は養蠶も盛んであつたが近年は殆んどやらぬ。

山は炭焼が主である。薪や割木は自家用にとるに止る。何しろ土地が不便であるので引合はないのである。炭は若干他所へも出す。此所から鍛冶屋まで三里であるが男は十貫俵二俵、女は同一俵を背板で負ひ、またその外に牛に二俵をつけて出すのである。歸りには酒や鹽などの日用品を持つて歸る。米を持つて歸ることは無い。(米は足りるから)一竈、小さいので百貫、大きいになると三百貫焼ける。併し一竈十四、五日はかかる。煙が出るのが三晩、それで風穴を塞ぐと煙が出なくなり、炭が出来るのであるが、それから三晩置く、熱くて中に入れないからである。竈は大抵は三百貫の竈である。さてその炭を三里隔つた岡谷に出すのであるが運搬に一日かかる。そして岡谷で五貫二百目が一圓である。村の下シモの入口の邊に天地根元宮造の小屋に炭を貯へまたその外に薪を置いてあるのを見たが、移出運搬の便利のためを考へたのであらう。

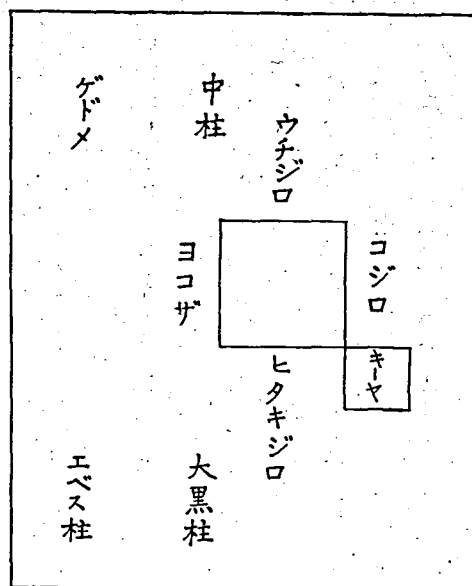
勞働には矢張り雪袴を用ひてゐる。雪は普通で四、五尺、昨年は一丈も積つたが、雪の時にはワラ、グツを用ひる。(採集標本第一號)これは足袋を穿いたままで穿くことが出来る。大雪には藁のスクベを入れたフミ、コミ(採集標本第二號)を穿きその下にカンジキをかける。今は藁製でないゴム靴

にカンジキをかけるものも居る。フミコミを作るのは一日手間である。運搬具としては背板セキタが用ひられてゐるが、その下にはセナク、チ（俗にコバンと呼ぶ）と稱する小判形の藁製の背中當てをあてる。男は背板で炭を二俵、女は同一俵を運搬するのであるが（四人の男三人の女が甲津原から甲賀まで運ぶのに會つた）艱などもまた背板で田圃から家へ運搬するのである。その他村人の實用品で土俗的なものにテゴやゼゼ、ヘゴなどがある。テゴは辨當などを入れるに用ひ、ゼゼヘゴは栗拾ひや落穂拾ひに用ひる。また山稼業ではマツチより火打の方が便利故、煙草を喫む人は、インドウに煙

草を入れ、ホクチイレにホクチを入れ、ヒウチ、カネとヒウチ、イシとを持つてゐる。

冬が寒いので家々圍爐裡を切つて居り、また風呂は所謂地獄風呂である。圍爐裡はユルリといひ、ツシの下なるサシモ、ハよりアマヅルにてアマを吊りアマの下に爐の中には三本足のカナゴが置かれその上に茶釜などがかけられるのである。その側なる薪入れはキトヤと言ふ。亭主の席はヨコザであり、それから向つて左がウチジロ、向つて右がヒタキジロ、正面がコジロである。（挿圖第一圖參照）

第一圖



氏神は天満神社(天神さん)であるが、山の神も野神もない。唯、メ、ド、ン、サン(メンサマ)といふ神さんがある。面堂さんの意であらう。氏神の森の中に氏神とは別の祠として存する。能の面が九體あるのが神體であると言はれる。⁽³⁸⁾今は新四月十五日の氏神の祭が同時に面堂の祭りであるが、以前はメン祭として別に祭があり、神酒や餅などを上げたものである。寶物の書物(カキモノ)が焼けたので由緒は明かでないが、早魃の時その面を姉川の川原に持つて行き御幣で水をかけると雨を下さるあらたかな神様であると言はれてゐる。また此の面は昔御所から賜つたものでこれを被つて踊つたりすると火災になりまたこれに觸れると病氣になる、四月十五日(年次詳かでない)に火災があつたのでこれをイハヒ込んでその日を祭と定めたのである。此の土地では早魃は稀であるが、早魃のときこの面を川原に出し竹の枝に御幣をつけそれで水をひきかけると雨が降る、今の老人は一回さういふことのアつたことを覚えてゐるとも言つてゐる。寺は眞宗であり、⁽³⁹⁾また村の入口には小さな石地藏を祀つてゐる。

此の村は姉川最上流の村、東草野の谷最奥の部落であつて隣國美濃との交渉は絶無ではない。第一この村は美濃の木地屋が入つて開いたものだと言はれてゐる。今此の村に木地屋は一軒もないが美濃の坂本には今も何軒かある、木地屋の末孫であるから系圖はいいと村人は自慢にする。曲谷の人が上流から木のコケラの流れて來るのを見て上流に人が居ることを知つたのであると言はれてゐる。そんな關係がある爲ばかりでもあるまいが、今でも美濃の諸家、^(モロカ)日坂、廣瀬の方とも縁組みし(嫁に行く方が多いやうである)諸家や廣瀬の鍛冶屋から鎌、ヨキ、ナタなどの刃物を買つたり、

またそれをそちらへ修繕に出したりするのである。尤も嫁とりは多くは村内で行はれ、また下との關係もあることは言ふまでもない。

併し何れにしても此所では道を迷ふことをマ、ガフと言つたりなどするくらゐで、そこには古風な何物かが残り、人情も純朴そのもの、また夏も蚊帳を要しないといふのであつて、誠に氣持のよい別天地をなしてゐる。唯、ここから曲谷に出るのにさへ小さいながらも一つの峠を越さなければならず、岡谷に出るには更に四一三米の可なり急な峠を越さなければならず、美濃に出るにも勿論國

第二圖



第三圖



境の峠を越さなければならず、二十貫もの炭を負つてそんな坂を越さなければならぬ村人の勞苦を察するときは誠に氣の毒の感を禁じ得ないのである。

第二圖は甲津原下流の谷を奥に向ひ撮影したものであり（聚落は圖の右側の山の鼻を廻つた邊に

立地する）第三圖は甲津原聚落の下流より全聚落を望んだところであり、（聚落中央の背景の森は氏神の森である）第一版第二圖は甲津原聚落に於ける代表的の民家（萱葺）を示すものである。

三、概 括

結論的な概括は凡てこれを後日に譲ることとしたい。（昭和九年十二月九日稿了）

註

① 湖路銘誌卷下に

姉川 河伯水神閻魔王ノ姉竜ノ栖ム川ナルユヘ姉川ト云ト三國傳記ニ見ユ

とあり、

琵琶湖志、第十八、坂田郡部に

姉川 源加須川嶽より出て甲津原曲谷より大久保の西を経て云々
とある。

② 近江國坂田郡志、下卷、三六〇—三六一頁に、

村社三之神社、天應元年の創立なりと傳ふ、祭神大山咋命、玉依姫命、大國主神なり、古へ三之宮如一権現と稱へたり、社傳に紀伊國熊野三所を勧請せしと見ゆ、一説に古へ膽吹山中に一の宮、二の宮、三の宮ありて當社は其三の宮なりと傳ふ、祭禮四月十四、
とある。詳しくは更に同書参照のこと。尚ほ此の村の寺の

姉川上流の村々

ことに就いては同書、下卷、四四七—五五九頁参照のこと。

③ 伊吹山の藥園に就いては、近江坂田郡志、中卷、（大正二年）

六八八—六九〇頁に詳しい記述がある。また同書、中卷、九二九—九三三頁には徳川時代宿驛の名物として柏原、春照の伊吹艾を挙げ、伊吹艾は蓬草を以て製せしに始る、蓬は膽吹山の名産にして、膽吹艾の起原分明ならざれども平安朝の頃より其名ありしが如し、柏原は膽吹山西南の宿驛なれば終に此地の名物となりたるなり、全盛當時は艾屋十餘軒を連ね、街道名物中に於ても殊に著名なり、明治維新後街道の人影絶え業を停めしもの多く今は唯龜屋佐京一軒を存せり」北國脇往還の春照宿にも名物伊吹艾を擧げしも北國路の交通は中仙道の頻繁なるに比すべくもあらざれば春照宿の伊吹艾は柏原宿の如く著名ならざりき」と言つてゐる。尚、詳しくは同書、九二九—九三三頁参照のこと。
また享保六年五月徳川幕府の探薬士が伊吹に登山し藥草の採集調査に従つたことに就いても同書、中卷、九七二—九

七三頁に詳しい記述がある。一行は五月十四日太平寺に一泊してゐる。また寛保三年四月にもその一人が藥草檢分として伊吹に登山してゐる。）

古い記事としては湖路銘誌卷上、伊福貴山の條に

今伊吹ニ種々古跡アリ（中略）此外藥草不知數入山拾猶藥店並ニ蕎麥辛味大根山葵石灰等ノ物産アリ蓬艾草ハカクト谷殊ニ勝ルトモ云

とあり、湖路銘誌卷上に

柏原 坂田郡五十三次ノ驛路伊吹蓬艾屋昆弱ノ名有同、卷下に

春照村 坂田郡ニ在、根元蓬艾採稔有 大和本草ニモ記 玉街道驛路也

とあり、琵琶湖志、第十八、坂田郡部に

柏原 伊吹山にて製する所の蓬艾當地より専ら賣出す女一權現 三の宮とも云上野の郷と云所にあり此邊より

上の方は土性殊に肥て珍しき藥草のゐる生ると云

とある。（春照のことに就いては記すところがない）

④伊吹の神社に關しては近江坂田郡志に

伊夫岐神社、郷社、伊吹村大字伊吹鎮座、延喜式内坂田郡五座の一、名神小、祭神につきては諸説あれども竊速比古命の子多々美比古命なるべし、一説に氣吹男命、天之吹男命なりと、近江輿地志略には素戔鳴尊とす、中古以後膽吹四大寺の僧當社の別當として社務を掌り伊夫岐大菩薩と

稱し、云々とある。詳しくは同書、下卷、三三六—三三七頁參照のこと。

湖路銘誌卷上には

膽吹大明神地主正一位八岐蛇カ所變也伊夫伎神祭之とある。

また近江國坂田郡志、下卷、三一五—三一六頁によれば無格社秋葉神社、祭神火產靈神、勸請年月不詳、無格社別相神社、祭神大山稻神又は氣吹稚神、勸請年月不詳、といふのが伊吹村大字伊吹にある。

尙、寺のことに就いては同書、下卷四四七—五五九頁參照のこと。

⑤太平寺の山緒に就いては湖路銘誌卷中に

太平寺 坂田郡伊吹山麓立龜山院王子兵部卿守良親王五辻宮暫ク皇居地也太平記ニ後醍醐天皇第五ノ宮ト云ヘルハ誤レリト勸功記ニ破ス

とあり、近江國輿地志略、卷之八十一、坂田郡第五に

太平護國寺 伊吹山下にあり。伊吹四ヶ寺の中にして三

珠沙門安祥上人の開基にして、光仁天皇の御願寺なり。寶

龜九戊午の年三月建立す。寺中三分あり。中之房、圓藏坊

兵部坊是なり。今太平寺といふ。

とある。

⑥坂田郡志、下卷、三〇六頁には

村社太平神社、祭神猿田彦命、勸請年月不詳、

とある。近江國輿地志略、卷之八十一、坂田郡第五に、

名超權現社 太平護國寺の界内にあり。すなはち三珠沙

門隨逐(寫本には遂とあり)の童子名超童子を祭所にして太平護國寺の鎮守とす。

とあるのはこれに當るか。

⑦寺のことに就いては坂田郡志、下卷、四四七—五五九頁に詳しい記述がある。

⑧近江國坂田郡志、下卷、三〇六頁に

村社谷王神社、祭神少彦名命、勸請年月、寛治二年三月九日

とある。

⑨寺のことに就いては坂田郡志、下卷、四四七—五五九頁參照のこと。

⑩湖路銘誌卷中に

大久保 北坂田郡在伊吹村北從是國堺迄二里半國堺ヨリ美濃千疋迄十八丁有

とある。

⑪藥草のことに就いては註③參照のこと。

⑫近江國坂田郡志、下卷、三〇六頁に

村社若宮八幡神社、祭神譽田別命、勸請、建武元甲戌年とある。尙、同書三一六頁には大久保に鎮座する無格社として三島神社と七社神社とを挙げ勸請年月は共に不詳、祭

神は前者は大山祇命、後者は大山咋命としてゐる。

⑬寺のことに就いては同書四四七—五五九頁參照のこと。

⑭湖路銘誌卷上に

板並 淺井郡在眞綿□田ス谷水ヲ受テ吉トナリ上下兩村也

とある。

⑮東淺井郡志卷三、五〇七頁によれば村社八坂神社は舊稱牛頭天王、祭神素戔鳴神であり、尙、同書五一二頁によれば下板並字長谷に無格社、長谷神社、舊稱長谷觀音、祭神伊非諸尊といふのがある。

⑯東淺井郡志に、下板並、善力寺、開基慶長八年といふのがあるに當るであらう。

⑰東淺井郡志、卷三、五〇七頁によれば、村社春日神社、祭神大己貴命。尙ほ同書、五一二頁によれば上板並字藥師堂に無格社、白山神社、舊稱白山權現、祭神白山比咩命といふのがある。

⑱東淺井郡志に上板並、萬傳寺、開基天正十五年とあるのがあるに當るであらう。

⑲東淺井郡志、卷三、五〇六頁によれば、村社、吉野神社、祭神瀬織津姫尊、武甕槌尊。

⑳東淺井郡志に、吉槻、光泉寺、開基明應三年とあるのがこれに當るであらう。

㉑東淺井郡志、卷三、五〇六頁によれば、村社白山神社、舊

稱白山權現、祭神伊弉冉尊。

②東淺井郡志に、甲賀、觀行寺、開基永正二年とあるのがこれに當るであらう。

③湖路銘誌卷中に

曲谷 淺井郡

とあり、近江國輿地志略卷之八十六、淺井郡第三に

曲谷村 吉槻村ノ北ニ在。石工多住ス。

とある。

④註②參照のこと。

⑤東淺井郡志、卷三、五一二頁によると、曲谷、住吉神社、祭神底筒男命、中筒男命、表筒男命といふのと、曲谷宇天神ノ森、天滿神社、舊稱天神社、祭神菅原道真（一説）太夫房覺明といふのと無格社が二社ある。これを指すのであらう。

⑥東淺井郡志に、曲谷、圓樂寺、開基明應三年とあるのがこれに當るであらう。

⑦湖路銘誌卷上に

甲津原 淺井郡在從是美濃諸家ニ出ル道有とある。

⑧東淺井郡志、卷三、五一二頁によればその他に甲津原宇宮谷山前に無格社春日神社、舊稱神明社、祭神素戔鳴命、天兒屋根命といふのがある。

⑨近江國輿地志略、卷之八十六、淺井郡第三に

甲津原村 相傳、美濃土廣瀬兵庫秀吉の母君を御供申此地に來、暫御居住猿樂能ありしとて、今に舞臺跡と云處あり。假面八あり。古は十ありしを、翁の假面二美濃國關が原へかりとるといへり、此村火災の時此假面とも悉やけずと云。能太夫卿師太夫と云者今に住す。とある。

併し、東淺井郡志、卷貳、六五一頁には、近江輿地志略、八十六「此地に來」は眞なれど、暫御居住」は誤なり。この地もと春日の樂人觀世（結崎）流の太夫の住みし所にして、御前帳 享保年間に至るまで、子孫連綿として、その伎を傳へたれば、小堀 亂平を経て後、淺野氏等が廣瀬よりの歸途ここに一泊せし時舞樂の大夫等猿樂を演じて、その旅愁を慰めしならんと言つてゐる。

⑩東淺井郡志、卷參、（昭和二年）六六九頁には

享保六年五月二十三日未刻甲津原村角左衛門の家より火を失す、折しも南風烈しく大火に及び神社二字寺院一字人家九十六戸を燒失し申半刻に至りて鎮火す、剩す所人家僅に三十五戸なりしといふ。宮川 日記

⑪東淺井郡志に、甲津原、行徳寺、開基永正二年とあるのがこれに當るであらう。